

「李澤藩美術館と李家のひとびと」



監修、増原宏

原作、「追尋美好世界的李澤藩」(徐素霞、文・絵)

杉山智恵 (訳)、増原喜代 (絵)

「李澤藩美術館と李家のひとびと」



監修、増原宏

原作、「追尋美好世界的李澤藩」(徐素霞、文・絵)

杉山智恵(訳)、増原喜代(絵)

はじめに

この小冊子は、李澤藩美術館を台湾新竹市を訪れる日本人に紹介するものです。李澤藩先生は台湾を代表する画家であり教育者で、ノーベル化学賞を授与された李遠哲博士のご尊父でもあります。李澤藩先生は 1930 年代に台北にあった師範学校で、石川欽一郎先生から水彩画の手ほどきを受け、独自の画風を發展させてきました。1987 年には台湾 10 傑に入る画家として表彰もされています。1989 年に亡くなりましたが、その生家であり、現在もご家族がお住いのビルのワンフロアが、多くの作品を保管し展示している美術館として開放されています。

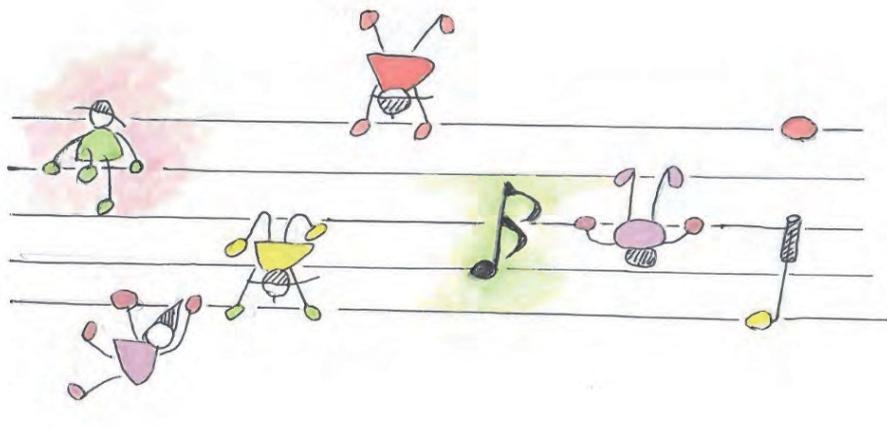
増原宏は 2008 年に新竹市にある台湾国立交通大學に講座教授として招かれ、理学院応用化学系の研究と教育に従事しています。杉山智恵の夫、杉山輝樹も 2015 年から同じ大学に赴任しました。二人は李遠鵬教授（李澤藩先生の末のご子息）の研究プロジェクトに参画し、台湾の研究、教育の状況を見聞きする中で、李家のひとびとの考え方、研究、生活の姿勢に共感し教えられるところが多く、これを台湾に来られる多くの日本人に知っていただきたいと思うようになりました。さいわいにも美術館に置かれている本の一冊「追尋美好世界的李澤藩」（徐素霞、文・絵）が易しく、丁寧に李澤藩先生のことを紹介していることがわかりました。これを杉山智恵が訳し、増原喜代が挿絵を描き、増原宏が一研究者として家庭と学問と人の生き方におもいをはせつつ編集したものです。

2019 年 9 月 台湾新竹にて
増原 宏

このお話は台湾新竹でのことです

夜も更け、人も草木もすべてが夢の中。流れ星がひとつ、またひとつ・・・・、空の向こうに消えて行きました。キラキラ輝く宝石のような光と一緒に消えて行きました。町のビルの少し開いている窓に吸い込まれるように消えて行きました。そして光は家の中でさらにきらきらと輝き部屋中を照らしてしていました。

その光の中に、小さな可愛い小人たちが軽やかに動き回っているのが見えました。



そして小人たちはお部屋にある沢山のすてきな絵を見つけ、その思い出を語り始めました。この思い出の主人公とは、この部屋にある沢山の絵を描いた李澤藩先生のことです。



李澤藩先生の誕生とその成長

中華民国設立の 5 年前、西暦 1907 年のことです。李澤藩先生は新竹市に住む李家の第 3 番目の子供として生まれました。彼のお父さんは有名なお寺の近くで雑貨屋さんを営み、20 人も家族を養っていました。

「どうしてそんなに多いの！」小人の一人が尋ねました。

「父方のおじさん一家や母方のおじさん一家も一緒に暮らしていたのだから！。彼の家は孔子廟から 100 メートルほどしか離れていなかったのだから、家族はみんな孔子の影響を深く受け、謙虚で大変礼儀正しく、読書好きだったんだよ。だから大家族でもみなとても仲良く暮らしていたのですって。」

「当時、学校は孔子廟の中にあり、彼はよくそこで遊んでいたんだよ。」



小人たちのお話は次から次へと広がり、朝になっても終わりません。

「しまった！今日はこんなに長く話をする予定はなかったんだ。話始めたら、朝が来ても話しは終わらないよ。」

そこで、小人たちは毎日交代で思い出のお話をしていくことにしました。

李澤藩先生は子供のころからとても良い子で、理解力があって勉強に熱心でした。

ところが3年生の時、先生の誤解から屈辱的な叱責を受けたことがありました。この経験から、彼は後に教師になったときに、まず起きたことを正しく理解してから子供に判断を下すべきだという教育理念を持つようになりました。

そのころの美術の授業の大半は色鉛筆や炭を使った簡単な模写作品ばかりで、高学年になって、ようやく水彩画を始めました。彼は、写生で自分のおもいを描き出すことができることに気づき、絵を描くことが大好きになりました。でも家族は絵を描くことを快く思わず、喜びませんでした。だから、絵を描く機会は多くはありませんでした。あるとき彼は水彩画の画用紙を一枚欲しいと思いました。父親が家を出て店に行くまでの数百メートルについて歩く機会がありました。その間ずっとお願いし、お手伝いをして、お小遣いをもらうことができました。やっと画用紙を手に入れることができた時のことです。

運動を愛し絵画に魅せられた師範学校生

小学校を卒業すると、彼は商業学校（中学校、高等学校に相当）へ入学しました。彼は、理科や数学の成績が大変良かったので工業学校（中学校、高等学校に相当）への転校を望んでいました。しかし、家の家計を助けるために父親の言うことを聞き、台北師範学校（大学に相当）への進学を選びました。彼が15歳の時のことでした。

小人の一人が尋ねました。

「でも彼は絵を描くのがとても好きだったのでしょうか？美術学校へ行きたいと思ったことはなかったの？」

小人たちのお話は続きます。

「どんな時代だったと思ってるの？そのころは絵が好きだからと言って画家になることを選べる人なんかいなかったのよ。どうしても家を助けて、お金を稼いで家族を養う必要があったのよ。それに、行けたとしても、当時は美術学校なんてなかったの。」

師範学校で学び始めたころは彼は寮に住んでおり、いつも家族のことを気にかけていました。放課後は先輩たちとジョギングしたり、高跳びや幅跳び、棒高跳びをやりました。こうした運動が彼を心身ともにたくましくしました。彼はそんな自分の成長ぶりを母に見てもらいたいと思っていましたが、その年に母は亡くなりました。彼は深く悲しましました。



師範学校 2 年の時、イギリスに留学経験のある美術講師の石川欣一郎先生が日本から招かれました。石川先生はとても温厚で、授業のときにはご自身の沢山の作品を生徒たちに見せてくれました。その中に一枚の風景画がありました。彼はその絵の中に優しく美しい世界の広がりを感じ、もう一度絵を描きたいと強く思ったのでした。この時から、休日も先生や同級生達と一緒に写生に出かけ、戻ると石川先生は修正点を指摘し、すぐれた作品を展覧会に出品しました。このようにして彼の絵画に対する興味はより一層深くなり、技術も日に日に進歩していきました。

卒業前の夏休み、石川先生は新竹の美術教師の研究会で講義を行うことになり、その助手として李澤藩先生を選びました。彼は絵の道具、画材を準備したり教室を整えたりする仕事の中で、石川先生の教師としての精神や、絵を描く態度について多くのことを学ぶことができました。

丁寧で創作意欲にあふれた小学校の先生

卒業するとき彼はとても優秀だったので、当時新竹で一番大きく歴史のある新竹国民小学校の教師となりました。

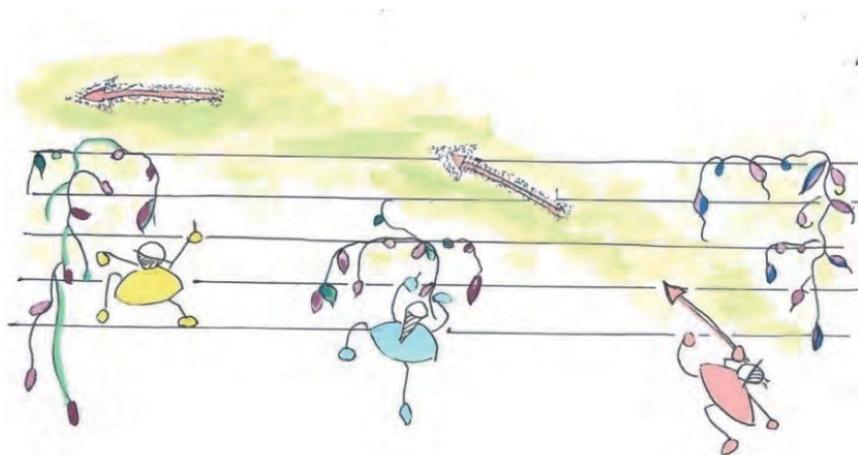
体も大変強く、運動会では毎回陸上や球技の試合の選手に選ばれていました。

小人たちは話しました。

「知ってる？彼は三段跳びで 12 メートル 3 センチの記録を持っているのよ。これは新竹で 15 年間も記録をやぶられなかったのよ。それ以外にも、毎年開かれる新竹地区の教師達の美術作品展覧会も請け負っていて、計画から展覧場所の配置まで、大小の事務仕事を全て細かく行っていたのよ。」

「なんでそんなによく知ってるの？」

「いつも彼のことを大好きだって言ってるでしょ。彼の話には飛びついちゃうのよ。」



彼は非常に思いやりのある先生でした。あるとき、非常に成績の悪いクラスの担任になりました。彼は考えて、生徒を一時間早く学校に登校させて、一時間遅く下校させたのでした。あたりが暗くなると、校長先生に電灯がついた部屋の貸し出しを申し出て、生徒たちに勉強を教えたのです。その後子供たちの成績はとても良くなり、学年で一番になったのです。

李澤藩先生の授業は楽しく、創意工夫にあふれていました。彼はいつも授業の内容を図や絵をかいて説明し、子供が理解しやすい方法を工夫し、その意味を完全に理解させました。絵を描くことへの興味を引き起こし、創作意欲を向上させるよう努めていたのです。また歌などの課外活動も楽しめるように工夫していたのです。創造力育成のための教育を実践していたのです。

李澤藩先生は子供たちが自分の国の言葉を忘れないように漢文の宿題にはとても厳しく指導しました。子供たちはその学習には非常に苦労しました。

李澤藩先生は、子供たちの良き指導者であると共に、自分自身も絵を描くことを常に忘れずにいました。授業以外の時間は常に戸外で写生し、その完成した作品を台湾美術展覧会に出展して入選していたのです。



新婚後の画家

李澤藩先生は24歳の時、台中梧棲鎮の蔡配さんと結婚しました。その時石川先生は一枚の油絵をお祝いとして奥さんに贈りました。李先生の奥さんは非常に聡明で、学校の先生でした。結婚後は新竹幼稚園の園長になり、仕事に便利なことと家庭のため、しばらくは幼稚園の先生の宿舎に住んでいました。その横の空き地にはバナナが自生していたので、李澤藩先生はしばしばその辺りで写生をし、「バナナ園」「潜園」など多くの作品を残しました。

結婚一年前には、彼の「夕陽」という作品が台湾の水彩画展の賞に選ばれました。その作品は当時の放送局に高値で売られました。その後、彼の生徒も美術展覧会で賞をもらいました。得た賞金は日本への旅費として使い、1930年末の「帝国展覧会」を見学に行きました。この展覧会の規模は非常に大きく、大きな絵が壁いっぱいにくっつも展示されていました。彼は絵の前に立ち、素晴らしい絵画を胸躍るような気持ちで鑑賞したのです。

この展覧会は李澤藩先生に強い衝撃を与えました。この時期、石川先生はすでに日本に戻り、また幾人かの台湾の画家も日本へ行っていました。李澤藩先生は自分にもその機会があることを強く願っていたのでした。



長男としての李澤藩先生

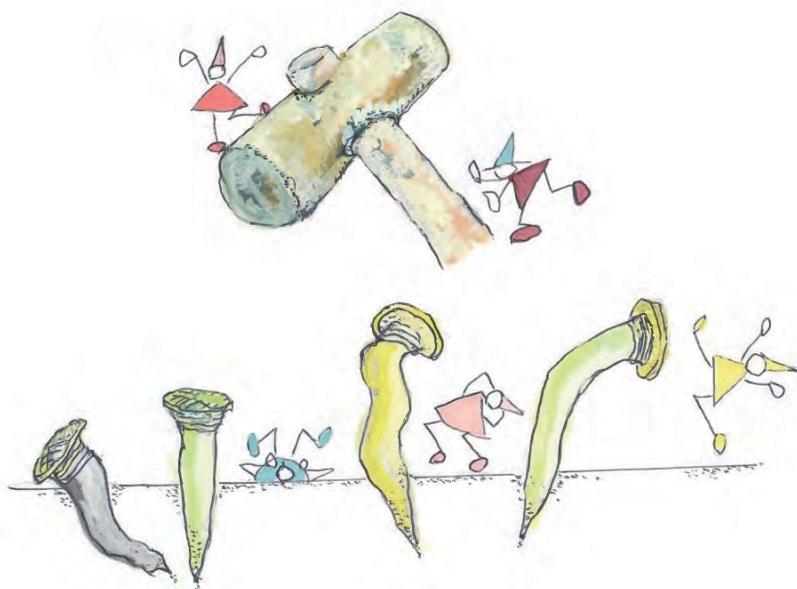
李澤藩先生が 26 歳の時に長男が生まれました。彼は日本に行くのをあきらめて台湾に滞ることを決意し、手紙で石川先生に絵の指導をしてもらうことにしました。努力を重ね、毎年多くの作品を展覧会に出し賞を取っていきました。

李澤藩先生の二番目の兄と父とはそれぞれ彼が 34 歳、37 歳の時に病気のために死別しています。そのため彼は長男として強く勇敢な、また厳しく慈悲深い長男としての役割をになう必要がありました。家庭の負担は重くのしかかり、彼と奥さんは非常に苦労しながら働きました。その中で、品格と崇高な精神を持つよう子供に教育し、「純粋な心」がこの世で最も大事なことであることを教えました。

子供が小さい時期には、先生は絵をかきながら彼らの宿題を見たり、またそばの川で一緒に釣りをしたり、写生をしたりしていました。子供たちが大きくなって海外に留学すると、彼らが故郷を思うときに見ることができるよう、自分たちの故郷の絵を彼らに送りました。おじいちゃんになってからは、**Big daddy** として孫のおしめを替えたり、おもちゃを作ったり、太鼓をたたいたり、歌ったりしていました。

李澤藩先生は子供たちにも強い体を持って欲しいと思っていました。子供たちに懸垂や砲丸投げや円盤投げを自ら手本を示して教えました。子供たちの安全にも特別気を配っていました。子供たちのために安全な道を繰り返し言って聞かせました。

彼は隣近所の人にも慈愛に満ちた態度で接していました。
あるとき隣の家が火事を出し、彼の家もひどい損害を受けましたが、
隣家からの損害賠償の申し出を断りました。そして子供たちに「彼
らの家は焼けてしまいました。それだけでも十分可哀そうなのに、
さらに弁償させるなんてできないよ。」と言い、身をもって子供たち
にその範を示しました。



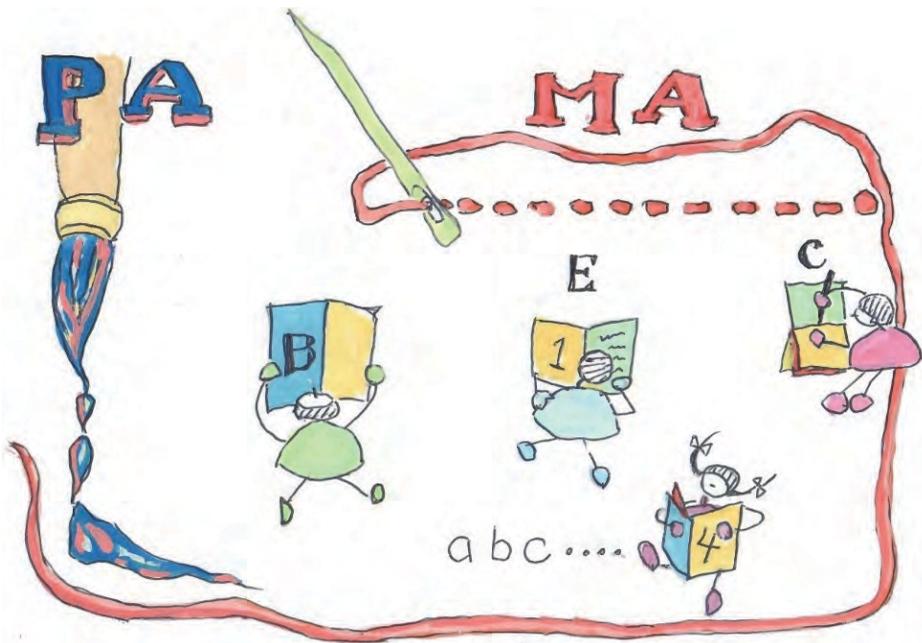
手先の器用な生活芸術家

李澤藩先生はリサイクルの専門家でもありました。

彼はいつも家の中の廃品を利用し、壊れてしまったものを便利で貴重なものに作り替えました。例えば、暦の紙を使って電灯のカバーを貼ったり、本棚や本立て、看板、玄関のベルを作ったりしました。椅子の足の底が壊れた時は、電灯の底の部分を用いて修理しました。家の小さな庭を細やかな気配りで管理していました。金魚や小鳥を飼い、蘭の花、ブドウなど各種の植物を育て、庭はどんどん華やかになって、鳥が歌い花の香りは年中満ち溢れていました。

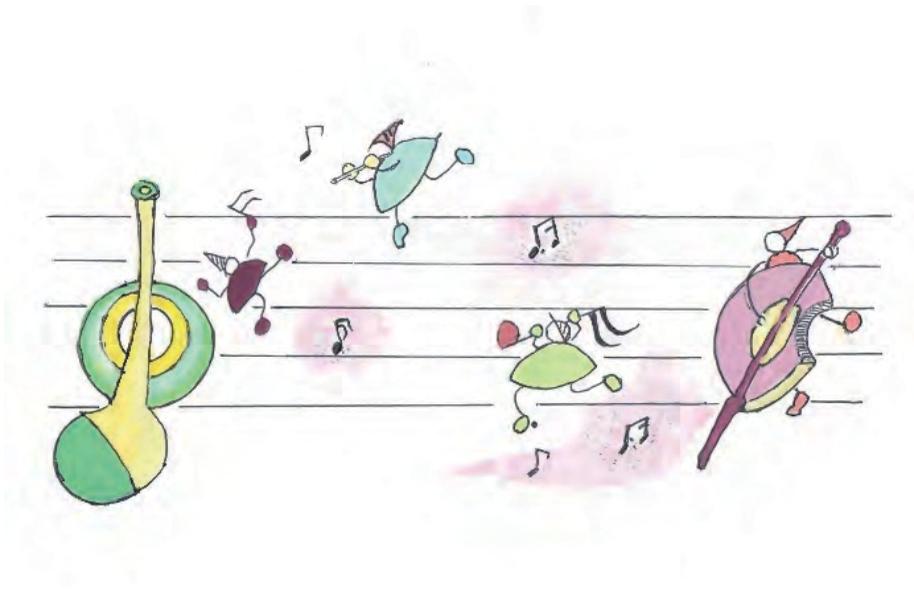
李澤藩先生は子供や孫たちに、はさみと折り紙だけを使うやり方でいつもおもちゃを作ってやりました。紙のお皿は生き生きとした動物になりました。毎年、元宵節（台湾で有名な国を挙げてのランタン祭）にはすべての走馬燈や花灯を作りました。それはとても緻密で可愛らしいものでした。子供や孫たちがそれを持って外に遊びに行くと必ず決まってみんなから羨ましがられました。

このように彼は心身の健康を最も大切にし、また芸術上の才能と生活上の智恵を併せ持っていました。彼が教えた生徒たちは、各自の専門分野の才能だけでなく、陸上や球技、音楽、絵画、撮影など人を驚かすような能力を示し、おしなべて創造的だったようです。



「画家」ではなく「教育者だ」と思っていた「画家教授」

李澤藩先生が40歳の時、台湾における日本の統治が終わり、彼は新竹師範学校の先生になりました。学校ではそれまで使用していた日本語をやめて中国語を使うことになりました。彼はとても懸命に学習したので、中国語で授業を出来るようになるのにそれほど長い時間はかかりませんでした。生徒たちに芸術的な環境で絵を描くことを学ばせるために、彼は細心の注意を払って美術教育を行いました。果物や野菜、花などの静物、時には郊外へ行き、風景の水彩画などを描かせ、展示も行いました。彼は写生に対しては特別な考え方を持っており、写生に最も重要なことは記憶力を高めることだと考えていました。また、絵を描くことに守りの姿勢は不要で、勇気をもって批評を受け入れ、検討してこそ自己の能力を高めることができると考えていました。木工、金細工、紙細工、石膏、粘土細工などの授業も行いました。彼は常に「我々は教育者であり、学生に絵の指導を行うことが仕事であって画家ではない。」と言っていました。それ以外に、工作、体育、軍の音楽隊、草花の育て方、生活環境の美化なども担当しました。



李澤藩先生は常に愛と励ましを持って教えを乞う生徒たちを指導しました。一度、3人の学生が不注意にも木製の窓枠を壊してしまったことがありました。本来ならすぐに退学させられるところだったが、彼は弁護しました。『故意ではない失敗は許されるべきです。』また、『解決は手指を切り落とすことだけではない。』とも言いました。学校側は彼の弁護によりこの事件を些細な出来事として処理することにしました。

また彼は一人の粘土細工が大好きな学生の母親に、ぜひその道にすませよう勧め、同時に子供には母の苦勞を理解するように言いました。その後、その学生は当時の台湾唯一の蠟人形づくりの専門家になりました。

当時李澤藩先生は、週に一度、台北にある国立芸術専門学校と師範大学の講師も務めていました。その日は早朝に普通車で台北へ行って運賃を節約する一方、車内での人々の様子などを観察したりしました。

彼は真摯に教師の仕事に取り組むとともに、各種の美術教材を作製し、多くの作品が賞を獲得し、高い評価を受けました。



努力を惜しまない画家

節約のため、彼は高価格の材料や道具を求めませんでした。安い絵の具や用紙、小さくなった筆、色あせた皿などを彼は活用しました。書き損じた部分は水で洗ったりしました。そのことによって、それまでは気づかなかった絵画製作上での特殊効果を見つけたりしました。

彼の絵の大部分は水彩画でしたが、水墨画、油絵もありました。いろいろな素材や技法を合わせることが好きでした。写実的な表現以外にも抽象的な描き方も試み、とても創造的な活動を展開しました。彼は訪れた地方の風景、家々の花や静物、人々、感銘を受けたものなどをテーマに描くことが最も好きでした。

彼はすべての絵を自分で装丁し、梱包し、注意を払って輸送方法や展示する方法を選びました。時には再度持ち帰り修理しました。いつも『一枚一枚の絵は私の娘のようだ。嫁がせるときはとても悲しい。』と話していました。



李澤藩先生は 59 歳で新竹師範学校を退職し、絵の展示会も終了しましたが、学校からの要請があれば、いくつかの授業を受け持つことを 70 歳まで続けました。

彼は絵を描く時間を非常に大切にし、常に外出して写生しました。家に居る時も狭い作業室で絵を描きました。子や孫がご飯ですよと呼んでも寸前まで筆を止めず、食後にはまた描き始めました。

あるとき孫が彼を連れて団体旅行に参加しました。バスの中でほとんどの人が疲れて寝ているときも、彼はせっせと沿道の風景を描いていました。2 日目の朝、イーゼルの上には、すでに彼が描いた美しい風景画が置かれていました。彼は常に『1 分耕せば 1 分の収穫を得る。絶え間なく描くことで良い結果を得ることができる。』と話していました。

彼はずっと石川先生の描写の要領を覚えていました。さらに、絶え間ない自分自身の創作を通して、『材料の特性を生かすことが、それらに生き生きとした動きを与える。』という新しい考え方に至りました。

『自分のことを天才とってはいけない。努力することが最も素晴らしい。絵画のリズムは生活習慣と関係がある。そのため、誠実な判断と思想を持つ必要がある。』と考えていました。

描き疲れたら休憩し、彼はいつも椅子に座るか窓辺に立って、扇で仰ぎながら、町の人やそこで起こる出来事を観察していました。このような様々なことが彼の目に収められ、彼の絵画表現の素材となりました。



見識を広めた外国旅行

小人たちは作品が陳列された部屋に入りました。そこにはたくさんの外国の景色が描かれた絵が飾ってありました。

61歳の時、彼は香港へ団体旅行に出かけました。香港のたくさんの景色を見て、彼の創作活動はさらに豊かになりました。彼の子供たちは勤勉な両親があちこち行って気晴らしができるようにと願いました。アメリカに住んでいた3人の子供たちは両親に対して、遊びに来てくれるように招きました。彼と彼の妻は67歳の時にアメリカへ行きました。

荷物を置くとすぐに、李澤藩先生は子供たちに絵の材料を買いにつれて行ってほしいと頼みました。この時、彼は多くの有名な名所を見たり、各地の美術館で展覧会を見たりして芸術の世界が広大なことを体いっぱいと感じました。

遊びに行くときはいつも、新鮮なもの、美しい景色を見たいと思い、見つけると車を止めてくれる様にと言いました。いつも簡単な道具を携帯しており、スケッチを行いました。子供たちに手伝ってもらい一生懸命景色の写真を撮りました。撮った写真を絵の参考にするためでした。

美と真実の追求

アメリカで李澤藩先生は多くの絵画や書物や芸術作品、自然の景色を心ゆくまで見ました。たった五か月でたくさんの絵も描きました。また、経験したことについての感想を日々日記に書き記しました。アメリカ生まれの孫娘のために、針金ハンガーや紙ナプキンを利用して故郷の伝統的な走馬燈や灯籠などを作ってあげました。

帰国してからの2、3年で、李澤藩先生の表現手法は一層変化していきました。絵のタッチはより自由で活発になり、使用する色彩も豊かになりました。1974年、李澤藩先生は台湾絵画学会水彩画部門で金賞を受賞する榮譽に浴しました。人々は彼の独特の作風をとっても称賛しました。



画家の晩年

李澤藩先生は70歳の時、大きな個展の準備のための過労で中風になりました。忍耐強く治療して、痛いとは一度も言いませんでした。ただただ治療してくれる人に感謝していました。病院から戻ると、リハビリのために毎日近所を散歩しました。毎回、直接澤藩先生をお世話していた下の息子に、自宅から遠いところで車から降ろしてくれるように頼みました。彼は迷惑をかけることを嫌がりました。病床にあるときも、自分でリモコンを持って様々な機器の操作を行いました。病が重い時も、子供たちの世話に対して、一番に感謝しました。また、彼は義理人情に厚く、信用を大切に思っていました。病に倒れた後も、突然友達に絵を描いてあげる約束を思い出して、命がけで絵を描こうとしました。家族の制止によって、その思いはようやく捨てられたくらいです。

李澤藩先生はリハビリのために毎日近所を散歩するときもスケッチをすることを忘れませんでした。そして先生は言いました。『絵は私の命です。回復した後、絵を描くことをやめたりはしません。私は趣味のために生き続けたいのです。』

このころ、李澤藩先生は人生に対して深い感銘を覚えつつ、過去の生活の多くの情景を思い出していました。このことで、しばらく休養した後、彼は記憶を頼りに、今ではもう存在しない古き良き時代の新竹の建物や風景の絵を描きました。彼の画風は非常に細かくなり、また描く対象の物事も豊富になりました。それはまるで彼のすべての記憶を描き残そうとしているようでした。どの作品も昔を懐かしむ思いがあふれていました。

小人は説明しました。

「見てごらん。これは東門城の絵だよ。2003年に郵便切手の絵柄に印刷されているんだよ。

李澤藩先生の絵には、現実と芸術的美観が融合されているんだ。彼の作品はどんどん世間の称賛を得るようになり、この後の数年は、国立歴史博物館のいくつものギャラリーで、何度も彼の個展が開かれました。そのような時も、李澤藩先生はいつも素朴で謙虚であり続けました。」



1986年、李澤藩先生が80歳の時、息子の遠哲氏が世界的な賞であるノーベル化学賞を受賞しました。毎日たくさんの方がお祝いにやって来て、当時の台湾の副総統さえもやって来ました。名誉や利益に興味がなく、このようなにぎやかな状況に慣れていない李澤藩先生は、『ノーベル賞とは nobiru（伸びる）賞だね。』とっていました。「これはどういう意味？」一人の小人が聞きました。「“ノーベル”とう発音は日本語では“伸びる”という言葉にあたり、その意味は「疲れて倒れこむ」という意味だよ。だからノーベル賞は「疲れて倒れこむ賞」だ、という意味だよ。」「わあ！彼はユーモアが有るんだね！」

こんな一面も併せ持つ先生でもありました。



1989年7月10日、李澤藩先生は肝硬変のため新竹市で亡くなりました。83歳でした。家族、親友、学生等のすべての知り合いが彼の死を惜しましました。

全ての人々が彼のすべてを懐かしみました。

この世界を愛し、責任感強く、最善をつくし、悪を憎む、結果ではなく努力を重視し、自分に厳しく、他人に寛容であれ、名誉や利益に興味がなく、才能を認める熱心な学生に対しては、絵を売るのではなく、額縁の値段だけで作品を譲り、画商を通しての絵の売買はしませんでした。

彼は自己中心的な芸術家ではありませんでした。理想と現実のなかでのバランス点を探り、できる限りの責任を全うする父であり、熱心な先生であり、傑出した画家でした。



彼の最後の 1 年に描かれた 5 つの作品は、台北市の美術館に収蔵され、次の年に「李澤藩回顧展」が開かれました。

1994 年、李澤藩先生の家族は古い家をビルに立て直し、その 3 階に『李澤藩美術館』を開きました。美術教育者としての李澤藩先生の視点やその想いを多くの人に広く知っていただくことを目的として、先生に対する家族の愛の記念として創りました。そして今新竹の美術館の窓からは李澤藩先生が私たちを見守ってくださっていることでしょう。



増原 宏

1966年東北大学理学部卒業

1971年大阪大学大学院基礎工学研究科修了、工学博士

京都工芸繊維大学、大阪大学などにおいて物理化学の研究教育に携わる

2007年大阪大学名誉教授

2008年より台湾国立交通大學講座教授

杉山智恵

1991年同志社女子大学学芸学部英文学科卒

任天堂(株)、大学、研究所などを経てフリーランスで活動

2011年より台湾新竹市在住

増原喜代

1966年奈良女子大文学部卒

大阪教育大学、保育専門学校、短大で幼児の表現教育に携わる

2008年より台湾と日本を往復